祝・30周年増刊号
RK・PRK news

発行：近視手術友の会　Vol.26
〒142-0062　東京都品川区小川2-17-14-102　FAX:03(5486)0120　2013年10月

日本において「近視手術」は、30周年を迎えました！

会員の皆様、お変わりありませんか。
今からちょうど30年前の1983年、私はモスクワで、近視手術を受けました。日本人医師として、初めてRK手術を体験した患者になったのですが、「見える感動を日本にも伝えたい」という思いに駆られ、帰国後、日本で最初の近視矯正手術専門機関、参宮橋アイクリニックを開設しました。

この30年を振り返ると、日本の近視手術の歴史は、決して平たんな道のりではありませんでした。有効かつ安全な手術を広めようとする私と、それを阻止しようとする様々な抵抗勢力や既得権益集団との戦いの歴史でもありました。事実は小説より奇なりと申しますが、「ノンフィクションの物語が書けるのではないか」と思う程、様々なことが起こりました。

そのような経緯からも、今年、30年という節目を迎えられたことを私は大変感慨深く思います。昨年、参宮橋アイクリニックは奥ノ山医院と統合し、山中真理子医師、筏井聡子医師とともに、眼科と内科を専門に診ております。

現在、当院が自信を持ってお勧めする「スーパーPRK（フラップレス・レーシック）」は、角膜に直接レーザーを照射し、多焦点レンズを作ります。角膜を切ってフラップを作る必要がないため、細菌感染の危険を最小限にし、眼球圧迫による後遺症、ドライアイの心配なども避けることができます。そして多焦点矯正面は調節負担を軽減するので、眼精疲労が起きにくく、老眼が早まるリスクも減らします。

近視手術を体験した眼科医師が専任の診療と説明を十分に行うことにより、患者様一人一人の不安解消に努めていきたいと思います。30周年を迎え、今後とも、皆様のご指導、ご鞭撻、暖かいご声援を、友の会と医院にお願い申し上げます。

2013年10月吉日
奥ノ山医院（参宮橋アイクリニック）
院長　奥山公道

目次 contents

冒頭の挨拶…1
週刊サンデー毎日より…2～5
ドクター奥山旅行記…6～7
近視手術の体験談…8～11
再手術について…12

「週刊サンデー毎日」に紹介されました

「近視手術30周年を迎えて」

「週刊サンデー毎日」に（2013年3月26日号）紹介されました。
「医療最前線　レーシック手術」の中で、レーシック難民にならない為の心掛けについて語りました。

15分30万円で近視が治る
ソ連式 矯正手術のビックリ！
角膜に放射線状切り込み

■ 1985年5月の「週刊サンデー毎日」

記者：本日は、1985年5月の「週刊サンデー毎日」をお持ちしました。「近視手術15分30万円」のタイトルで奥山先生が本誌竹内記者の取材をお受けになった折のもので、紙面が黄色味を帯びています。
奥山：28年前ですね。近視手術にとって歴史的記事だったのですが、エライことになったと思いました。

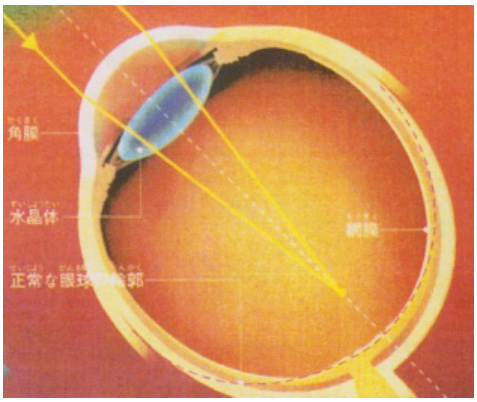
記者：何故ですか？
奥山：クリニックの電話が鳴りっぱなしで、終日つながらない状態が数日続きました。なぜなのか、山手線に乗って分かりました。全車両に週刊毎日の中刷り広告があり、「近視手術15分30万円」のタイトルが目に飛び込んできました。

記者：近視で悩みを持つ患者さんが大勢いらしたのですね。
奥山：ええ、しかし残念なことに検査をして手術に至った患者さんは3割に満たなかったのです。手術適応が無かったり、過大な成果を期待された方はお断りしました。
当時、私は内科医でしたので、院長の若山久先生がお断りしておりました。
記事に誤りがあり、内科医が眼科の手術をするかの様な誤解を与えたので、訂正を求めた記憶があります。

記者：先生御自身が手術をお受けになり、30年経ちましたが、いかがですか。
奥山：ありがとうございます。おかげさまで、両眼共に遠方の視力は0.6で、近方は、0.4あり、普段は眼鏡無しの生活を送らせていただいております。
当時、近視手術は10年したら失明するかもしれない、とのうわさが広まっており、よく質問を受けました。最近は誰も尋ねてくれません。(笑)

記者：30年で、老眼の方はいかがですか。
奥山：老眼鏡を時に使用します。けれども初期のRK近視手術は、メスで切開して得られる矯正面に多焦点性があるようで、軽度の老眼鏡で済んでいます。RKも後期になると、矯正効果の増強を図る為、角膜中央と末端の厚さの違いを考慮し、グラデーション切開をしたので、結果として多焦点性が失われ、調節の負担が増したようで、老視の早まる例が見られました。丁度、強い近視にフタを作り、レーザーで沢山削った時のレーシックのような状態に近いかもしれません。

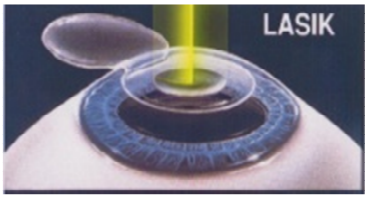
記者：調節負担とは聞き慣れない言葉ですが……。
奥山：我々は、2種類のレンズで物を見ています。角膜と水晶体です。角膜を整形するのが角膜屈折矯正手術です。水晶体は微小な腱組織であるチン小帯の助けでピント合わせをします。ピント合わせは、無意識に行われます。心臓の鼓動や瞬きなども、自律神経により無意識に管理されます。



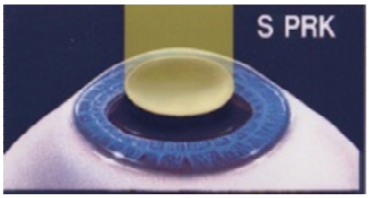
■角膜と水晶体による二つのレンズ

記者：最近、レーシック眼科でない医療機関を取材し、「レーシック難民」の話をよく聞きますが、調節負担と関連がありますか？
奥山：「レーシック難民」はお気の毒ですが、患者さん自身が原因を理解していないことが最大の問題でしょう。

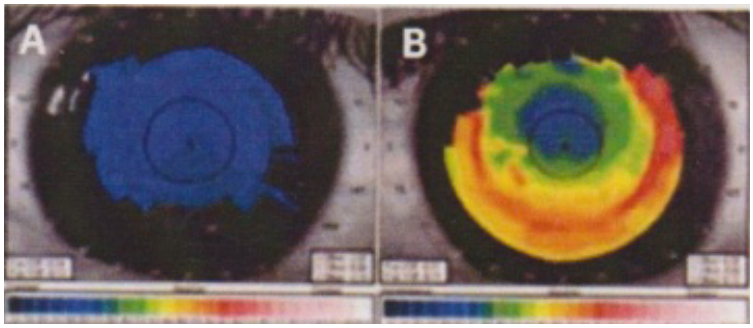
記者：レーシックを受けた後の不具合の原因は不明なのですか？
奥山：最大の問題は近視が病気であることが理解されていないことにあります。健康で透明な角膜を屈折異常による近視があるからという理由で加工するのは許されない、近視は手足の長さといった身体的特徴に過ぎない、メガネコンタクトで十分だ、という考え方です。私が近視手術を受けた30年前は支配的な意見でした。けれども手術を受ける患者さんが増えたことで、近視や近視眼に対する認識が変わってきました。
　例えば近視の人の緑内障は、近視でない人に比べ3倍、強い近視の人なら6倍の確率が統計的に示されました。近視は屈折異常にとどまらず、病的な眼球軸の伸展や角膜カーブが先鋭化する例があり、緑内障以外に網膜出血や網膜剥離等が合併しやすいことを考慮すると立派な病気です。従って、手術を受けた眼球はコンタクトレンズやメガネが不要になっても、近視でない理想的な眼球と比較すれば何らかの点で劣ることを、すべての近視患者さんは記銘すべきです。
　「レーシック難民」の原因は、2種類に大別されると思います。矯正面に相当するレンズが単焦点性、あるいはレンズ深度が浅い事による不具合からくるものと、矯正面の大きさに由来し、暗い所で瞳孔が大きくなったときに、レンズ面が瞳孔をカバー仕切れない事によって起きる不具合です。前者は術後視力が1.0以上で、角膜形状解析検査でも非の打ちどころが無いのに、患者さんは肩がこる、頭痛、めまい、目が乾く、朝夕の視力差を訴えます。眼科医に相談しても、データー上に問題はなく、軽い遠視からくるのではないか、果ては上記の不定愁訴から精神科を紹介され、医療機関を漂流し「レーシック難民」と呼ばれます。
これらの訴えは、私見ですが、矯正面がフタを作った残りの薄い角膜の部分から作られ、結果、レンズ深度が浅くなるのが原因ではないでしょうか。レンズの場合は、絞りでカバーしますが、人の目の場合は調節負担に影響するのではないかと考えます。



■単焦点性スキャンビーム



■多焦点性ワイドビーム



■単焦点性スキャンビーム
の角膜解析図

■多焦点性ワイドビーム
の角膜解析図

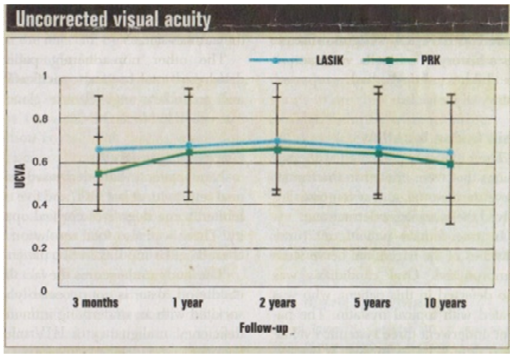
記者：手術による過矯正（遠視）が原因ではないのですか？
奥山：カメラで言うところのレンズ深度もしくは被写界深度が浅い矯正面ということだけなので、検査をしても、屈折値を表すデータは大方の場合,プラスマイナスゼロと正視に近い状態で、遠視とは言えないでしょう。レーシック後に眼の乾きを訴える患者さんが多いのも、遠近のピント合わせに当たる調節負担が増し、無意識に瞬きが減る為ではないでしょうか。35歳以上の近視の患者さんで、－6D以上のレーシック後に多いようです。平成20年6月号の日本眼科学会誌の巻頭言で、東北大学眼科（現大阪大学眼科）の西田幸二教授は、レーシック後の老視対策として、どちらかの眼に軽い近視を残すモノビジョンや、エキシマレーザーを用いて角膜に多焦点性を持たせる様に角膜を切除する方法について触れ、多焦点性のプロファイルとソフトウエアーの開発が鍵であると指摘されました。けれど、私見ですが、レーシックというフタを作る技法下において、多焦点性矯正面を作るのは難しいと思います。フタを作ると、矯正に資する角膜の厚さが足りなくなるからです。

記者：レーシック後に老眼が早く来たと言われない為の対策を教えて下さい。
奥山：対策として、４０歳前後で、強い近視の場合、フタを作らずにレーザーを当てるPRKを選択し、レーシックの場合はモノビジョンをお勧めします。既にレーシックを受けて過剰な調節負担を感じる人は、軽度の遠視眼鏡の使用をお勧めします。2007年、レーザー近視手術800例の長期観察をした、スペインのJ.アリオ博士は、10年間で約1.0Dの近視の戻りを右図の如く報告しました。レーザー近視手術後は、時間の経過とともにやや近視化するので、調節負担は軽減します。

記者：他にPRKをお勧めの人はいますか?
奥山：格闘技のようなスポーツに従事する人も、安全性の観点からフタを作らないPRKを選択すべきでしょう。

記者：もうひとつの不具合である矯正面と瞳孔の大きさについて教えて下さい。
奥山：全ての近視手術について言える問題点ですが、近視手術後の矯正面は、暗がりで瞳孔が広がるとカバーしきれない現象が起きます。

記者：暗いところの視力低下ですか？
奥山：近視の人の眼球は眼軸と呼ばれる奥行きが延びている人が多く、「近視の鳥目」と言われるように、暗がりの視力低下がみられます。加えて、カバーしきれない現象により夜間の視力低下が起きます。角膜中央の物を見る光学ゾーンの大きさ次第です。



■レーシック（青線）とPRK（緑線）手術後10年の視力の変化（平均値）

記者：スターバーストやハロー、グレアと呼ばれる現象を伴いますね。
奥山：はい。スターバーストは、RK後の放射状切開創傷部の瘢コンに光があたって星の光の様にヘッドライトが見える現象です。

私も術後2－3年感じましたが、瘢コンの状態と瞳孔の大きさによって次第になくなりました。瞳孔は加齢と共に広がりにくくなります。老視は、暗いところが見にくいと言われる所以です。ハローは、PRKやレーシックの初期に矯正面が小さかった為によく起きた現象でした。PRK後、上皮が再生するまでの間、光源がにじんで見えるのがグレアで、月の輪郭等が照射の境界領域の影響により二重三重に見える現象がハローです。上皮再生と共に消失又は気にならない程度に減少します。注意しなければならないのは、デフォーカスと呼ばれる矯正の過不足と混同しないことです。同様に、矯正後のレンズ収差の問題も過剰に取り上げられがちです。

記者：これからも先生は近視手術をなさいますか？
奥山： 近視眼を助ける近視手術は素晴らしいのに、厭世的雰囲気が漂い、面倒だからコンタクトやメガネで我慢なさい的状況が形成されつつあるのは、近視手術を自らが受けて、家族全員にしてあげた私として、非常に残念です。3.11災害の津波によりメガネ、コンタクト難民が大量に発生しました。近視手術は災害対策として重要です。一刻も早く、病気である近視手術に健康保険が適用されるように望みます。同時に、レーシック難民にならない為に、患者さんは術前に納得いくまで説明を求め、近視手術方法の選択を誤らないようにお願いします。

記者：レーシック難民は主にネット上の情報の様ですが、今回の取材に当たり奥山先生、参宮橋アイクリニック、フラップレスレーシックを検索したところ誹謗中傷以外に考えようのない投書を紹介したレーシック情報サイトを見かけましたが、ご苦労されていませんか？
奥山：私に関する様々な偽りの情報の書き込みが、もっともらしい形式で流されて大変迷惑しました。驚くべきは、それら中傷サイト運営のスポンサーが競合するレーシック最大手のクリニックであることです。ネット空間のインモラルの象徴だと思います。私やクリニックそして近視手術に悪いイメージを持たせる目的でビジネスが行われているようですが、近視手術全体に悪印象を与え、見識が疑われますので、医業や医師のモラルを自覚し、誹謗中傷につながるポータルサイトを支援するスポンサー活動は止めるべきです。ネット選挙活動が取りざたされ、不公正な諜報活動は遅かれ早かれ摘発されるでしょう.
記者：本日は長いお時間、有難うございました。

この取材は、3月26日発刊のサンデー毎日「治療最前線 レーシック治療」のために行われました。友の会会報に転用させていただきました。（編集部）

ドクター奥山 旅行記

メキシコ紀行
マヤ文明をたどる旅

■メキシコの世界遺産である
「古代都市テオティワカン」太陽神殿前

今春、スペインの征服者コルテスによって滅ぼされた「マヤ・アステカ文明」をたどる旅に出た。マヤ文明とアステカ文明は縄文・弥生と、平安・平城京くらいの時間的に隔てられており、「異なる文明」と言って良いほどである。

マヤ歴は、昨年2012年12月にこの世の終わりを予告しており、是非天文台を見て歴を確認したいと思った。同行のグループは最年少が56歳と59歳のご夫婦であり、最年長者80歳。人生経験豊かな人ばかりである。メキシコシティ3日目の深夜3時に出された日本食弁当で、8人の食中毒患者を出した時は、約1名？のドクターによる活躍もあり、幸い参加者全員、体力不足を露呈することなく、おおむね無事に観光する。

■神殿前にて

さて、いつの世も「旅は道連れ世は情け」というもの。今回の旅行仲間のひとりである某夫人は、65歳も過ぎ、「いつ離婚しようかと虎視眈々」であったが思いがけなくも、夫がガンに罹り手術をし、予定が狂ってしまい、未だに「腐れ縁」をつづけているとのこと。

年に3 回以上は海外旅行をしているカップルも数組いて、「お金」「健康」「時間」こそ重要なファクターであると語る。なかでも「健康が一番」と力説する参加者もいた。「健康以外は、何とかなりますよ」というわけである。人の寿命だけは神のみぞ知るであるが、60歳を超える人々が、世界遺産をめぐる旅で、残りの人生で、あといくつの世界遺産を踏破できるかに賭けている。

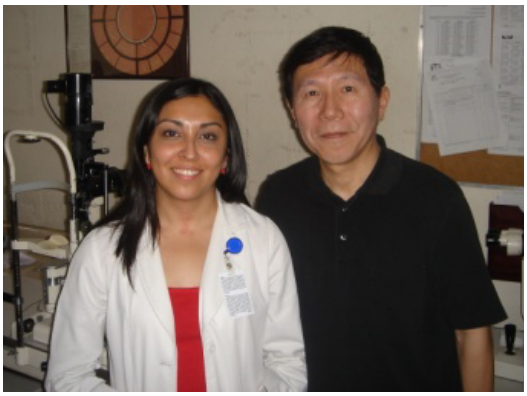
世界的規模のお遍路めぐりを続けている人々がいる現実は、筆者にとって心強く、励みにもなり、嬉しいかぎりである。とはいえ「旅」という人生における「極上の逸楽」が、義務や目標に課されて欲しくないとも思う。

■マヤ遺跡はジャングルの中にあった

■マヤの民家でトルティーヤ(パン)作りに励む

メキシコの眼科研究所を視察

現地ガイドに「メキシコシティの治安は極端に悪い」とか、「メキシコ人は人柄は良くてもいい加減」などと、大いに吹き込まれた。個人行動をしないように、再三、予防線をはられたが、私は単独行動を決行した。結果、夜間に出歩かぬかぎり危険はなく、道を訊いても「いい加減ではない」ことを知った。iPhoneマップで簡単に道順を教えてくれる。ただし、道を訊ねるのは「40歳以下」の若者に限る。



■マリア・バラケア先生とともに

単独行動の理由は、このたびのもう1つの目的であるメキシコ市内のマルケス医師記念の眼科研究所のバラケア医師と会うためだ。メキシコのレーシック眼科手術の現状について情報交換を行うことができた。先生によると、メキシコでも最近はレーシックによる合併症を避けるために、PRK（奥ノ山医院で行っている「フラップを作らずにレーザーを当てる治療法」）が見直され、PRKの手術件数が増えているそうだ。中南米の国々に特徴的なのは、レーシック手術が国策により「無料化」され件数が増えていることである。保険が適用されている国も少なくないので。わが国でもぜひ導入を検討してほしい。

マヤ神話に「視力」についての逸話がある。
はじめ神は「泥」から生物をつくったが、使い物にならず壊してしまった。つぎに「木」から人間を造ったが神を崇めることもなく、無礼なので、また壊してしまった。次に「とうもろこし」から人間を造ったところ「精緻な人間」ができ、神に劣らぬ見事な創造物となった。しかしこのことは、神にとって少々都合が悪くなったので、人間の目の前に少し「かすみ」をかけることにした、というのである。

最近は「かすみ」のかかった人間が増えてきているように思うのでせめて近視レーザー手術をしてあげたいと思う。

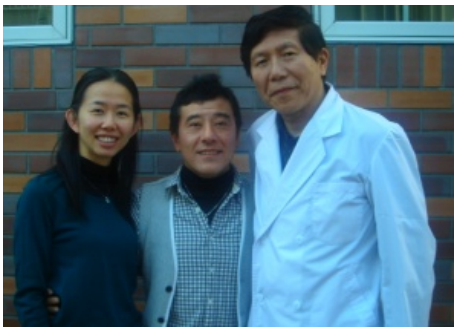
■世界遺産であるメキシコ総合大学

■メキシコ市眼科レーシック病院

旅の最終日、メキシコシティ空港で亀田３兄弟の三男であり、日本人として初めてＷＢＯ世界王者となった和毅（ともき）君に遭遇。写真をお願いした。
スーパーPRKは格闘技に向いていますよ！

■メキシコ・シティ空港で亀田和毅君と

近視手術の体験談



夫婦で趣味も仕事も快適に

宮城　ネストルさん（夫）
池田　泉さん（妻）

池田　泉さんのデータ
■オペ日　右・左2012年6月9日
■オペ後の視力　右0.1→1.5　左0.05→1.2

私（宮城ネストル）はアルゼンチンのブエノスアイレス出身で、日本に来て24年経っています。中学生の頃から目が少しずつ悪くなって、メガネを使い始めました。しかし、5年前に日本で、奥ノ山医院ではないのですが、レーシック手術を受けて、メガネが要らなくなりました。そのときはとてもうれしかったです。メガネが壊れたり、コンタクトを落としたりして、不便な思いをすることもなくなりました。安全、安心に暮らせています。

視力がよくなったことで、普段の生活にも、車の運転にも役立っていて大変助かっています。手術を受けてよかったと思っています。

昨年、久しぶりにアルゼンチンに帰ったときに、家族と話をしたところ、甥もレーシックの治療を受けていました。彼と話して分かったのは、現在、アルゼンチンでは、プレパーガという保険制度があり、25歳以上になると、レーシックを全て保険の負担で受けられるのです。近視がひとつの保険適用の対象として、認められています。ただし、強度近視で一定の度数を超えた場合、一部自己負担する必要があるようです。

日本でも近視治療が保険適用を認められるべきですね。例えばメガネがないと地震や火事で、逃げ遅れることがあるからです。これからは、日本も近視治療に保険適用の道を進んでほしいと思います。

私（池田泉）は、長年メガネ・コンタクトを使用していたのですが、その煩わしさ故にずっと近視手術を考えていました。「近視手術といえばレーシック」というのが一般的なのですが、趣味のラテンダンス・サークルの友人たちから、もっと安全で有効な手術があるよ、と奥山先生のクリニックを紹介してもらいました。やはりダンスで知り合った夫も近視手術には大賛成で、後押ししてくれました。

手術はほとんど痛みがなく、術後1週間の異物感などが収まった後は、全く問題なく順調に回復し、メガネ・コンタクトが不要になり、現在、快適に過ごしています。夫も私も、趣味でも仕事でも、目の問題を気にせず、取り組むことができています。

手術後、数か月して、妊娠し、まもなく出産予定なのですが、昨年、手術を受けておいて、本当に良かったと思います。というのは、妊娠中は、近視手術を避けた方が良いとのことだからです。子育てや仕事で忙しい中、メガネ・コンタクトが手放せない状態だったら、ずっと大変だったのではと思います。今は安心して子育てに取り組める気がします。近視手術を考えていた矢先に、妊娠して、手術が延び延びになってしまった人の話も聞いているので、私はタイミングが良く、ラッキーだったな～と感じます。

■院長奥山から　夫婦ともに視力が良くなってよかったですね。ネストルさんが言われるように日本でも近視手術に保険が効くようにしたいものです。

スーパーPRKで　人生が変わりました！！

豊田　千加さん（女性）
（Chika：ジャズ・ヴォーカリスト）
■オペ日　右・左　2005年6月17日
再右2009年3月20日・再左2012年４月13日
■オペ後の視力　右0.01→1.2　左0.01→1.2

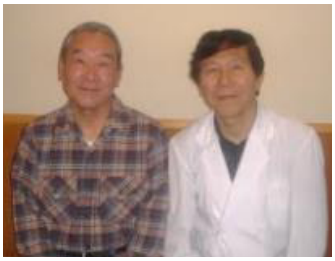
私は小学校低学年の頃から強度の近視と乱視で、眼鏡をかけていました。歌手になってからはコンタクトレンズを使い始めましたが、乱視がひどかったため酸素透過性などの製品は使えず、一日の使用は6時間と限られていました。ドライアイもひどく、常に異物感や充血を訴えていたため、日本ではコンタクトの処方をしてもらえなくなり、米国から取り寄せるしかなくなりました。ドライアイにコンタクがよくないと分っていても歌手という職業上、ぶ厚い眼鏡でステージに立つわけにはいかず、昼夜に公演があるときは、昼のショーの後コンタクトを外し化粧を全部落とし、夜のショーの前にまた装着しステージ用アイメークをし直すという煩わしさでした。そんな状態なのでステージ以外の時間は眼鏡が手放せませんでした。

子供が生まれてからは授乳もお風呂も添い寝もすべて眼鏡。眼鏡では入れてくれないプールもあり、子供達との時間にも不自由さがつきまといました。そんなある日、当時、幼稚園生だった次男の友達のお母さん（Yさん）から「Chikaさん、いつも眼鏡だけど不自由じゃない？レーザー手術したら？人生変わるってよ！」と言われました。彼女自身は眼が良かったのですが、ご両親やご姉妹とそのご主人など、ご親族計６名が手術を受け、「人生が変わった！」と言っておられるとのこと。以前、私が雑誌で見た近視手術はレーザーをあてる前に眼の表面をカンナでスライスする術式で、怖くてとても無理だと思っていました。でもYさんは「私の家族が受けたのはスーパーPRK（フラップレス・レーシック）だからスライスせずレーザーをあてるだけ」「えっ！それなら私にも出来るかも！」ステージの不便だけでなく、当時私は離婚問題のさなかにいて、3人の息子を一人で守っていくには絶対にこの眼をなんとかしたいと切実に感じていました。そこでYさんの言葉を信じ2005年参宮橋アイクリニック（現・奥ノ山医院）を訪れました。

奥山先生は穏やかな表情の中にパイオニアの力強さを秘めた方で、手術に関するお話を聞くうち、私の中から恐怖は一切なくなりました。先生はまた、「スーパーPRKは近視乱視矯正手術として最高の方法であると確信していますが、この手術が始まってからの歴史は20年なので、それ以上年月が経ったあとの臨床例がありません」と丁寧に説明してくださいました。私は、「息子達にとって母親と過ごすのが大切な小学校卒業までの期間を不自由なく過ごせたら、それ以降たとえまた眼鏡に戻るようなことがあっても全く構いません」とお返事しました。

手術日程を決めたあと父に手術の話をしたところ、「奥山先生、知ってるよ！俺も若い頃、近視手術を考えて奥山先生のクリニックを訪ねたことがある」と言うのでビックリ！（私のド近眼は父譲りだった）。術後検査の際そのことを先生に話すと、「巨泉さんのお嬢さんだったのですね。お父さんが来院された当時のRK手術は現在ほど進歩しておらず、強度近視を裸眼で生活できる程まで矯正できなかった。なので、手術を諦められたのですが、お父さんの叶わなかった夢がお嬢さんの眼で叶いましたね」と言って下さいました。先生の温かいお言葉に、運命的なものを感じたのを覚えています。かくして私の視力は裸眼で生活できるほどに回復。『人生が変わる』というYさんの言葉は真実でした。ステージでも共演ミュージシャンや観客席のファンの方々の顔が良く見え、当時8歳、5歳、3歳だった3人の息子たちとの生活も不自由が無くなりました。私の乱視は奥山先生がPRKを始められて以来の強さだったそうですが、一度の手術で完璧に矯正でき、視力も再手術でさらに改善し、今では両目とも1.2です。手術を勧めてくれたYさん、勇気をくれた息子たち、そして私の人生を変えてくれたスーパーPRKに心から感謝しています。

■院長奥山から 豊田千加さんは、やはりジャズ・ヴォーカリストのマーサ三宅さんと大橋巨泉さんのお嬢さんです。巨泉さんがコンタクトレンズと老眼鏡を取っかえひっかえで御苦労された話を聞いた記憶があります。千加さんはお父様ほどの強い近視ではなかったので、舞台に立つのに便利な視力まで回復されました。これからも歌姫として輝いて下さい。



術後20年たっても快適に過ごしています

今村　裕二さん（男性）
■オペ日　右・左1993年8月
■オペ後の視力　右1.2　左1.2

早いもので手術をしてから20年近くなりました。現在でも右1.2左1.2の視力を保っております。車の運転を職業としている私は夜や雨の状況下では心身共に非常に負担がかかりました。そんな時、手術で視力が回復することを知りました。コンタクトレンズやメガネから解放される、とても素晴らしいと思いました。しかしその時は迷いましたが、妻とも話し合いをしてついに決心しました。それは奥山先生自身、そして先生の御家族の皆様も既に手術をして、その安全性を証明してくれたからです。私はレーザーで施術をしていただきました。術前検査も術後のケアも入念でした。今でもとても快適です。手術を考えている方は、奥山先生に何でも相談して下さい。納得するまで先生は説明してくれますから。

■院長奥山から　20年間、今村さんは定期的に検診にきてくれます。最近は老眼の傾向もあるので特に説明をさせていただきました。

強度の近視で他院では断られましたが奥ノ山医院では手術していただけました

森　美作子さん（女性）
■オペ日　右2008年5月23日・左2008年7月18日
再手術　右　2009年2月6日
■オペ後の視力　右0.01→0,4　左0.03→1.5

眼鏡使用歴40年以上、裸眼では日常生活も出来ないのに、老眼も加わりますます不便さを感じていました。レーシックという視力回復手術がある事を知り、早速友人の紹介を受けて、某レーシック手術医院の検査に行きました。しかし、あまりの強度近視なので手術はできないという事でした。「年齢的にもそのうち白内障の手術を受ければ少し見えるようになるかもしれません」とあまりに冷たいお言葉。

他医院にも電話しましたが、やはり「ちょっと難しいかもしれません」という返事ばかり。半ば諦めていた頃、「他医院で断られた方も是非ご相談下さい」という奥ノ山医院（旧 参宮橋アイクリニック）のサイトを目にしました。早速、お電話したところ、「相談だけでもいらして下さい」と言って頂いたので藁にもすがる思いで奥ノ山医院に伺いました。

奥山先生は私にじっくり時間をかけてPRK手術のすばらしさ（もちろんリスクも含め）を丁寧に説明して下さいました。先生も驚かれる右目－23Dという強度の近視でしたが、それでも「手術できますよ」と言って下さり、その時の嬉しさは今でも忘れることができません。強度近視の右目は2度に分けての手術となりました。1度目の手術で薄くした角膜が、再手術が可能な厚さに回復した9ヶ月後に、2度目の手術を受けました。今では、裸眼で日常生活はもちろん、車の運転も出来るようになりました。

3年前に乳がんの手術を受け、抗がん剤の辛い治療をしている時も、以前のように枕元の眼鏡を探す必要もなく、思い切って手術を受けていて本当に良かったと思っています。ただただ奥山先生にお会い出来たことに大変感謝しております。

■院長奥山から　森さんは－23Dという最強度近視でした。3年前に当院の扉を叩かれた時に、私は「3年がかりになります」と説明しました。スーパーPRKで片目づつ、右目に2回、左目は1回の手術を実施し、右0.4　左1.5になりました。

薄い角膜でも再手術が可能です

Y･Mさん（女性）
■再手術日2013年　4月
■再手術後の視力　右1.0→1.2　左0.6→1.0

まず、一番すごいのは奥山先生の分析力です。ちょっと検査しただけで、どこがどうなっているかが分かっちゃうんです。私は以前レーシックを受けたのですが、左目だけ再度近視が悪化したため奥ノ山医院にてPRKという方式で手術をしてもらいました。なぜレーシックではなかったかというと、左目の角膜が薄く、再度フラップを作成する方式のレーシックができなかったからです。その際、昔行ったレーシックがどんなものだったか（左目はやはり角膜が薄いためフラップは作成しない方式で行っていたことや、どこをどのくらい削ったのか、なぜレーシックをすると夜の電灯がモワっとして見えるのかなど）も先生は分かりやすく丁寧にいろいろと説明してくれました。以前レーシックを受けた時は、このような丁寧な説明はなかったです。流れ作業のように手術をされた記憶があるのですが、ここでは違っていました。

そして手術の結果、1.0→1.2（右）0.6→1.0（左）まで視力が戻りました。どうやら、右目は左目にひっぱられて悪くなっていたとのことです。さらに、術後も丁寧に診察してくださり、本当によい病院だと思いました。先生の能力もしかり、その人柄も素晴らしいです。とても温厚で優しい方です。そして、角膜が薄くて近視矯正を諦めているみなさま、ぜひ奥ノ山医院を選んでください。きっと視力回復の手術ができますよ！

■院長奥山から　他院で手術後の患者さんには特に気を遣う場合があります。Y・Mさんの場合フラップレス手術が薄い角膜に必要でした。術後の見え方が気にいって下さり幸いでした。

夢を叶えるために手術を受けました

川出健雄さん（男性・福岡県・オペ時40歳）
■オペ日 1991年12月 ■オペ後の視力 右1.2 左1.5

私が近視矯正手術を受けたのは21年前。当時の視力は両眼とも0.02か0.03程度で、会話をする相手の顔もぼやけるほどでした。その頃、私には「競艇選手になりたい」という夢がありましたが、受験するには1.0以上の裸眼視力が必要でした。何とか視力を回復させようと、視力回復センターや針治療などを行ないましたが、ほとんど効果が得られませんでした。

そんな時に出会ったのが「RK手術」です。不安もありましたが、手術に関する本を読んだり、実際に手術を受けた人の話を聞き、手術を受けようと決心しました。手術後、しばらくして眼帯を外した時の感動は今でもはっきり覚えています。それまでぼやけているのが当たり前だった周囲の風景や人の顔など、あらゆるものが信じられないほどにくっきり見えたのです。

競艇選手になる夢は叶いませんでしたが、20年以上経った現在も、メガネやコンタクトレンズのいらない快適な生活を送らせていただいています。

■院長奥山から　競艇選手になる夢のために手術されましたが、20年以上経った現在も視力は右1.2、左1.5を保ってらっしゃいます。術後角膜の長期にわたる安全指標である角膜内皮細胞数も両眼共に3000個/平方mmを保持し、問題ありません。

奥の山医院からのお知らせ

再手術と聞くと「一度、近視手術をしたのに、また近視が戻ってしまうのですか？」と質問されますが、元に戻るわけではありません。年齢と共に変化する場合、微調整が必要です。眼鏡を作り直したり、コンタクトの度数も変更したことを思い出してください。角膜にメスを入れる術式のレーシックの再手術は角膜を再度傷つけるため多くの負荷がかかります。

一方、スーパーPRK（フラップレス・レーシック）は角膜上皮の再生を待って、6カ月程度時間を置けば（30%から50%の角膜再生が見込まれ）複数回の手術が可能です。一度手術を受けられた方もご相談下さい。

一回の手術で角膜を削る量には限度がありますが、複数回できるので強度や最強度近視の方にも矯正手術を受けていただくことができます。
フラップレス・レーシックの別の方法として、スマイルと呼ばれる角膜の負担が少なくて済む手術が開発されました。フタを作らない手術であり、フェムト秒レーザーを使用するので、レーシックの様に角膜をブラインドカットしないで済みます。
現在のところ「作用する粒子」が荒いのが難点ですが、発生する気泡を上皮下で回収出来れば「切らずに治す近視レーザー手術」として広まるでしょう。

15年前に、ブダペストのイワン博士（フォーカス　メディカル）が世界に先駆けて同レーザーの開発をしました。恩師フィヨドロフ博士に実用研究参加の提案があり、便乗訪問させていただきました。しかし残念なことに、恩師がヘリの事故で2000年に亡くなりました。もしエネルギッシュな博士が生きていたら、角膜表面に侵襲を与えない夢の近視レーザー手術が具体化して、プールでひと泳ぎする前に手術を受けてから、という時代が到来していたかもしれません。

奥ノ山医院　（参宮橋アイクリニック）
来院のご予約方法

完全予約制　予約電話：03－3411－0005

■受付時間：月～土（午前）9:30～11:30
（午後）13:30～17:30

■住所：東京都世田谷区下馬2－21－26
■交通手段
電車　東急田園都市線　三軒茶屋駅（南口出口より徒歩7分）
東急世田谷線　三軒茶屋駅（徒歩10分）
バス　東急バス・小田急バス・三軒茶屋駅（徒歩10分）
HP　http://www.sangubashi.com/

ホームページに最新情報を定期的に更新いたします。
ぜひご覧ください。